

しか思っていないのでしょうか。あの苦難な時代を少しでも知っている人の中にも、戦後の「暖衣飽食」「消費は美德」などという物心両面のぜいたくな生活に溺れ込んでしまい、苦しみ、悔しき、つらさ、悲しみなどの人間として固有の情念を、あまり感じなくなってしまう人も多いようです。

だからといって、今の人にあの時代に私たちが体験した苦しみなどを、再び経験させる必要はないでしょう。いや、絶対に経験させてはならないことです。ただ、このような事実があったということ。そして、それを乗り越えて強く、たくましく生きてきた人々がいて、その人々が、今日のこの国の平和と繁栄の基礎を作ってきたのだということだけは、忘れないでもらいたいと念願するばかりです。

## 朝鮮から渡満した一学徒の顛末

東京都 西脇 章 治

### 一 学徒動員

私は、大正十五（一九二六）年二月二十三日  
に、大阪で商社マンの子供として生まれた。父の  
転勤に従って大阪、東京、青森などを転々として  
いた。小学校四年生の春に朝鮮に渡り清津を経て  
群山の小学校を卒業し、群山の中学校に入学した  
が、三年生のときに京城（ソウル）に転居したの  
で、京城の中学校に転校した。このように小学  
校、中学校は、随分変わったものだった。

昭和十九（一九四四）年の春、上級学校への進  
学を決めるに際して、私は内地の高等学校を目指  
していたが、両親は元来あまり頑健でなかった私  
の体を案じて、食糧事情の良い大陸の学校で勉強  
することを勧めた。両親の説得により、中国大陸

における唯一の日本の高等学校である旅順高等学校を受験することとなった。

生まれて初めて鴨緑江オウリョクコウを渡り、幼いころから名前だけは知っていた旅順という軍都で入学試験を受けたが、幸いに合格した。後に再び同じ経路を通って旅順に行き寮に入った。

寮生活の間には、いろいろな書物や人物評などとともに、哲学的な考え方、逸話、警句などを学び、よくは咀嚼そくじやくできないまでも、これこそ高等学校教育の真髄ならんと、有り難く胸に収めたことであつた。専攻したドイツ語には新鮮な味わいがあり、名句や名言、果ては軍歌、歌謡曲のたぐいまでも誇らしげに口に行っている先輩を真似て、熱心に覚えたものだった。

戦局の推移に伴って緊張感が高まり、学業よりも軍事教練や、勤労奉仕に励むことの方が、大事な使命であるかの如き雰囲気になつてきた。十九年の六月になると、三澗堡の飛行場建設のために、二週間の土木作業に従事した。

海軍式の消灯ラッパが鳴る中で、ハンモックに寝た夜は狼の遠吠えが聞こえて、不気味な経験もした。誇らしくかぶつていた白線の丸帽は、戦闘帽に代えられた。

一学期までは、まだ先輩に囲まれて旅順高校生としての生活を味わっていたが、夏になると、一、二年生約十人ばかりが公主嶺に駐屯する戦車隊で、機甲訓練を受けた。肉と魚が一日置きに出る食事は、航空隊とこの戦車隊だけと言われ、一般家庭の乏しい食卓との違いに驚いたものだった。

先輩たちと一緒に八人部屋の寮生活は、間もなく三年生が繰り上げ卒業し、続いて二年生が勤労動員と相次いで去って行き、私たち一年生だけとなつてしまった。

昭和十九年の暮れには正月休みとなり、久しぶりに京城に戻り、実家で一家団欒のうちに過ごした。いよいよ旅順に戻る朝、京城駅まで送つてくれた母に向かつて、私は「もう会えないかもしれ

ないね」と、非情な言葉を投げ掛けてしまった。母は、自分の襟巻きをはずして、「これを巻いて行け」と言つて、私に押し付けて、寒さの厳しい中を家に向かった。私はそれをすぐに首に巻いて列車に乗った。旅順に戻れば直ちに徴兵検査だし、戦局の厳しさを思うとその後すぐの入隊、そして直ちに最前線配置ということが十分に予想されていたからであつたが、悲しそうな背中を見送つた母とは、これが本当に最後の別れになつてしまつた。

母はこの後、弟を連れて清津に単身赴任して父のもとに行き、八月十三日のソ連軍上陸、それによつての山中避難行、そして三十八度線越えなど過酷な行動に耐え抜いて、内地にようやくたどり着いたが、避難行による心身共の疲労が原因となつて亡くなつてしまつた。この経緯は、二年后に私が大連から引き揚げて来て初めて知り、京城駅頭で私が言った言葉を思い出し、母には申し訳の無いことを言つたと、墓前にぬかずき声をあ

げて詫びたことであつた。

昭和二十年の二月には、徴兵検査を受けたが、理科系の学生であつた私は徴兵猶予となつた。二年に進級するとすぐに、学徒動員で沙河サガコウ口にあつた満鉄の鉄道工場での勤労作業に従事することになつた。工場の裏手にある、春柳塾という施設で、旅順工大生と一緒に寝泊まりして、そこから毎日工場に通つた。初めは車軸油の再生作業、そして次はパイプを輪切りにして、鋳物で造つた刃先をはめ込んで木銃を槍に仕立てる作業であつた。

その作業が終わると今度はいよいよ本番の、蒸気機関車の解体修理に回つたが、これはきつ作業であつた。しかしながら当時の意識の中では、ひたすら作業に精を出すことに生き甲斐すら感じていた。すでに文科系学生はもとより、私の一歳上か、または下の理科系学生も召集されて、軍用列車に詰め込まれて前線へと向かつて行つていたから、同年代の理科系学生である我々だけがなぜ

に残されたのか、という変な義憤を感じていて、その扱いに不審を覚えたものだった。

昼飯を入れた飯盒をぶら下げて、塾の建っている丘を下り、連京線の線路をまたいで裏門から工場に入り、帰りはこの逆をたどる毎日が続いているうちに、ソ連の参戦が報ぜられて、何かが確実に押し寄せてくる気配を感じていたが、ついに、八月十五日を迎えることとなった。

いつもと変わらぬ、やかましくて忙しい職場で、朝から真つ黒になっている機関車に挑んでいた我々のところに、「正午に事務所に集まれ」との指示がきた。昼になって日本人だけが狭苦しい事務所に集められたが、妙に静まり返っているみんなの前で、職場長だけがうなだれていた。異常なまでに緊張していた空気から、何か重大事が起きたらしいということは察せられたが、具体的にそれが何であるかは思い浮かばなかった。

ラジオから初めて聞く天皇陛下のお声らしいものは聞こえたけれども、ひどい雑音で内容は分か

らぬままに過ぎてしまった。そのとき突然に、職場長が声をあげて泣き出した。それに続いてラジオの前に居並ぶ幹部職員や、女子事務員も泣き出した。我々だけは、どういふことなのか状況が分からずに、ただ呆然として立ち尽くしていた。

やがて気を取り直した職場長の指示でみんなの姿勢を正して、職場長の発声により「天皇陛下万岁」と「大日本帝国万岁」とを声高らかに唱和して事務所を出たが、我々にはまだこの事態をよく飲み込めなかった。

まぶしい太陽の光の中で、そこかしこに腰を下ろしていた満人は、この妙な会合をひそひそ話しながら眺めていた。

「施設を守れ！」との指示で、我々三人は木銃を手に転車台に腰を掛けていたが、そこに来た組長は沈んだ声で、「長い間ご苦労さんでした。一生懸命に皆さんに働いていただきましたが、その甲斐もなくついに日本は無条件に、降伏したので」と言った。

その言葉を聞いて、職場長のあの熱い涙の意味が初めて分かったが、一瞬「そんな馬鹿なこと？」と思ひ驚くうちに事態は急変していった。

今まで動いていた工場の轟音が、ぴたりとやんで、目には見えない大きな幕が静かに降りてくるような思いがした。

工員の一人が、「こんな物！」と、どなりながら我々が先日まで汗を流して作っていた槍先を床に投げ付けていた。青い空だけは、いつもと変わらず澄み切っていたが、仰ぐとなぜか涙が溢れてきて止まらなくなっていた。満人の嘲笑も、自分たちは警備に当たっているということも忘れていた。

「そんなことがあるものか！ 今の今までこんなに頑張ってきたのに！」と思うと、木銃を握る手は震え涙が流れたが、その反面今まで頼りにしていた何か大きな物体が、ぼったりと動きを止めてしまったような感じがしていた。

だれかが「顔と手を洗おう」と言ったので、み

んなは我に返り黙って立ち上がり、身嗜みを整えると、例の如くに飯盒を下げ、うなだれながらも口々に、「満人の前だぞ！ 日本人らしく堂々とやろう」と言い交わしながら夏草の茂る裏門を出た。これが、私と沙河口工場との永遠の別れとなつてしまつたのだ。連京線のレールは、静かに冷酷に横たわり、春柳塾は無表情に建っている。運命などという生ぬるい言葉では言い表せない悔しさと悲しさと、そして我々の腑甲斐の無さで、ただただ涙となつて流れ落ちていた。みんなは、声を押さえていつまでも泣いていた。窓から見える大和尚までが、我々を責めているように思えた。

夜がきた。もはや何の力も無くなつた我々の、これから先のことは考えようがなかった。明かりを消した私の部屋に寮生十数人が集まつたが、みんなは何も語らなかつた。そのうちに、だれかが涙ながらに、「神州は不滅だ！」と叫んでいた。

校長から電報がきて、「帰省できる者は、速やか

に帰れ」という指示であったが、だれも何も言うとはしなかった。深々として夜は更けていき、ラジオからは、「落ち着いて行動せよ」という意味のことだけが繰り返して放送されていた。

どのくらい経ったか、「おい西脇！ 暴動らしいぞ！」という言葉で起こされた。闇を透かして見るとともに、枕元のナイフだの木銃だのを確かめた。耳を澄ましていると、満人部落から銅鑼や呼び子などの鳴り物に混ざって喚声が聞こえてくる。近付いて来る気配は無かったが、一応は起きて身支度をしたものの、なすすべもなくただ様子うかがっている、どこかで「警察か、軍隊に早く連絡をしろ！」と言ったようになってる教授に対して、「事態が変わった今では、どうにもならない！」と、言い返している声があった。しかし、夜中の二時ごろのことであった。大したことにはなさそうだと、身支度をしたままで横になって朝を迎えた。

大日本帝国の赴くままに動かざるを得なかった

我々は、敗戦による境遇の急変で、突然足元をすくわれ、目標と方向性を失って倒れ込んでしまったし、この状態がこのあとどのくらい続くのか、想像すらかなわなかった。かくして、旅順高等学校の学生としての生活は、事実上終止符が打たれてしまったのだった。

## 二 拾われて

八月十六日、満鉄の生計所へ買い物に来た主婦たちは、日本刀や槍、ピストルなどで武装した男性グループに守られながら行動するようになった。満人の鉄工所では、槍を作り始めたとのうわさを聞いた。我々が残した道具をねらって、塾の周りには蟻が蜜にたかるが如くに満人が集まってきた。

工大生が満鉄中央試験所から持つて来たアルコールと、ジャガイモの油炒めで最後のコンパを開くことになり、私の部屋にみんなが集まり車座になった。飲むほどに、酔うほどに、それぞれの者がそれぞれの思いをがなり立てていた。「この

味を忘れるな！」と、叫びながら顔を覆って泣く者もいれば、「この恨みは忘れんぞ！ 馬賊になっても、新しい国を造るのだ、西脇！ お前の旗揚げのときには必ず知らせろよ」と言いながら、私の手を力いっぱい握る者もいた。工大生は、「これからだぞ！ 頑張れ！ 旅順高等学校万歳！」と両手をあげていた。だれかが寮歌を歌い始めたがだんだんと声が途切れてきて、そのうちに嗚咽に変わり、さらには怒号に変わっていった。「やるぞ！ やるぞ！」とだれかが叫び、『君が代』を歌い始める。みんなして、「祖国は不滅だ！」と泣き叫んでしまった。

八月十九日、いよいよ全員が寮から退去する日を迎えた。大八車に荷物を満載して、心残りのする春柳塾を出た。この先どうなるのかは考えられずに、とりあえず私と同じ条件の学友と二人で旅順での籠城を決め込んで、他の学友と別れた。

以前によく遊びに行っていたT夫人の家を訪ねた。話を聞いたT夫人は、「ここにいなさい」と

旅順に行くことを真剣になって止めてくれた。T家とはもともと何の関係も無かったのだが、かつて学友の一人が病気になったおりに、ここで養生させてもらったことから縁ができたのだが、心の温かい人であった。ご主人は北支にいて、息子は内地の学校に就学しているという事情が、我々旅高生を温かく受け入れてくれた因であり、我々もしばしば遊びに行つては、「鬼子母寮」などと名付けて親しんでいた家であった。だれ一人として知り合いの無い私たちにとっては、そこにしか顔を出さず先は無かつたのだった。

そこで、とにかく旅順行ききの情報を得ようと沙河口の駅に行つてみたが、奉天以南の状況は皆目不明、ましてや朝鮮方面の様子などは全く知れず、列車の運行についても何も分からなかつた。旅順行きをしきりに止めるT夫人の情に引かれるままに、一日一日が過ぎてしまった。町の狂騒とともに、日本人に加えられる危難は深刻の度を増してきて、銃声や剣光が絶えず、血なまぐさい話

は日常茶飯のこととなつてきた。在留日本人は一日も早い引揚げをひたすら待ち望んで、家々の門戸を閉ざしていた。

旅順行きは、いよいよ難しくなつた。このままT夫人の好意にすがつていては申し訳無いので、宿を探そうと思つたが、動員手当てとしてもらった三百円と仕送り受けの残りだけでは、思案のしようも無かつた。そのうちにソ連軍が進駐して来て、列車不通の理由が分かつた。

結局、我々はT家に寄宿することになつてしまった。引揚げ近しと考へたT夫人から、「何とか食いつなげるから心配しないで！」と言われるままにT家で起居し、今までの学力の不足を補うため熱心に自習に励んでいた。時折は、満人の暴行に備えて隣組の見張り当番を務めたり、鉄道用枕木を割つての薪作りに汗を流していた。

そんなところに学友のI君が忽然として現れた。八月十二日に応召し本隊を追つているうちに終戦となつたが、列車の運転経験のある召集兵が

列車を運転してここまで来たとのことだった。その夜は、I君を誘つて特別警戒の当番に出た。その夜は、八路軍が入つて来るという情報で、警備の警察官は一戦を覚悟していた。猫の子一匹通らぬ真つ暗闇の町中では、遠くの自動車の音もよく聞かえた。ヘッドライトをぎらつかせ、赤い旗をなびかせて乗用車がスピードを出して走つて来た。

ソ連兵がときどき回つて来ると、みんなはそれぞれ携行していた日本刀、拳銃、槍など伝家の逸物を隠し、口をつぐんで目だけを凝らしていた。見回りの人が、どこからかまだ糊の乾いていない宣伝ビラを持つて来た。それには殴り書きで、「中華民国万歳、八路軍」とあつた。「八路軍」という赤い文字の不気味さが、我々警戒員の空気を凍らせた。

夜半過ぎに、大勢の満人の喚声と、激しい銅鑼の乱打、呼び子の響きが起こつた。満人街で、松明をかざした群衆がひしめき合つている様子で



あつた。T夫人には、かねて予定していた避難先に逃げてもらい、我々は応戦態勢をとり、「一歩たりとも近寄せぬぞ！」と覚悟を固めたが、幸いにも状況はそれ以上の進展はみせずに、そのまま収まつてしまつた。それからは、暴動に備えて木刀、木銃、電球（相手にぶつけて音を出す）、油、アルコール、そしてポロ布（油をひたし火をつけて投げる）などを準備し、お互いの最期のためのために、青酸カリを分配した。

小競り合いは頻繁に起きていて、半殺しの目に遭つたとか、日系警察官によつて暴徒を散らせたとかいふ話が絶えなかつた。無力な我々は、世話になつてゐるT夫人とその家だけは、何とか守り抜こうと話し合つてゐた。

市内電車はいつの間にか右側通行になつてゐた。乞食のような姿で、日本人に物乞いをしてゐる日本兵もいた。人通りの中で軍靴を脱がされて略奪される男もいる。高級車に乗つて、長い赤旗をなびかせてゐるソ連軍将校もいたかと思つと、

日本刀をぶら下げて得意気に闊歩してゐるソ連兵など様々であつた。

駅前には、対戦車砲が満人の屋台と並んでゐる。駅の構内はソ連軍専用の客車と、戦利品の物資を満載した貨車でいっぱいであつた。列車の窓から裸で降りて顔を洗つてゐるソ連兵に、満人がしつこく付きまといつてリングを売つてゐる。

十一月になつて、我々の寄宿してゐた満鉄の社宅が八路軍に接収され、T夫人は親せきの家に行くことになり、行き先の無い我々二人は、またしても同情してくれた家に引き取つてもらへることになり、芝生町に移つた。この家は、おばあさんと息子二人、娘二人を抱えてゐる大世帯であつた。

ここに移つてしばらくすると、私は旅順高等学校を卒業したことを知らされた。卒業したとなれば、もはや旅順に戻るといふ名目は全く無くなつた。

ただ飯を食つてばかりはおれないので、八百屋

の店番をして働くこととなった。乱雑な市場の中では、絶えず保安隊と売り子とのトラブルが起きていて、目の前で人が撃ち殺されることなどは珍しくなかった。流れ出た血が、寒気の中で湯気を立てていた。

みそと、しょうゆの行商を思い立ち、大八車を手に入れて学友と商売に出た。四斗樽入りのみそとしょうゆをくくり付けた大八車を引きながら、「おみそに、おしょうゆはいかがですか!」と売り声を上げると、「あら! 学生さんなの」と同情されて、売れ行きは悪くなかったが、日増しに増える社宅の接収によって引越しがあちこちであり、頼まれて大八車で荷物運びをすることが多くなり、みそ屋を運送屋に切り替えて「旅高舎」の名で精を出した。

学生服に旅高の校章、それに理科のSバッチを付けていたから、町でソ連軍の将校からいきなり声を掛けられたことがあった。「お前は、エンジニアか?」とか、「自動車を直せるか?」と言わ

れたが、故障で困っていたらしかった。少々やり取りしていた末には「モスクワに來ないか」とか、「学校も大きいぞ」「高級な仕事もあるし、給与と女は希望をかなえてやる」などと言っていた。私は学生であることを認めてもらえたのは嬉しかったが、実際には学生らしい日常にはなっていない現実を改めて思い直し、情けなく寂しい気持ちにさせられた。

接収地域は急速に拡大して、芝生町にも及んできた。黒い軍服を着た保安隊が、真紅の房を二尺ほど垂らした拳銃を見せびらかしながら、長靴のままに家が上がって来て、めぼしい家財道具に片っ端から白墨で印を付けてしまい、持ち出すことを禁じ、さらに数時間以内にここから退去しろと言った。行き先は勝手に探せという態度だった。「露助に盗られるくらいなら焼いてしまえ」ということで庭でたき火を始めると、煙を見てすぐに飛んで来て、もしそこに彼らのねらっている品物があると「中国の財産を損なう罪」というこ

とで、銃剣を突き付けて引き立てられた。日本人の住むところは一人一畳が基準とされ、次第に居住空間が狭められていった。

芝生町の家にも、保安隊員がいきなり土足で踏み込んで来て、奥の間で寝ていたおぼさんの枕元に立って、「接收」という言葉を繰り返していた。一同は連鎖街にある会社の二階に移ることにした。与えられた猶予は二日間、何十年と住んできた自分の家を、理由もなく明け渡さねばならないおぼさんの気持ちを思うと泣けてくる。おびただししい家財道具の山の中へ、彼ら保安隊員は執拗に入って来て、あれこれと欲しがっていた。何でも欲しいという態度があらさまに見えた。

大切にしていた人形を抱きかかえながら、教科書類をかばんに詰める女の子の表情が印象的だった。私は、動員の間片時も離さず被っていた略帽を灰にした。絡み付くとげのある野草の如くに、絶えず出入りする彼らをかき分けながら明け渡し作業を進めていたが、今まで「旅高舎」と称して

他人の荷物を運んでいた私にとつては、皮肉な役回りとなった。学友に応援を頼んで、三台の大八車を用意して運んだ。その後、先に世話になったT夫人が、身を寄せた親類の家が接收されて行き場が無くなり、今までの縁から同じ屋根の下で暮らすことになった。

### 三 窮乏

次第に毎日の生活が苦しくなった。働きに出なければ食べられないので、食糧のもらえる製氷工場の雑役に雇われた。ソ連人民委員部と書かれた腕章のお陰で、使役狩りからは免れた。

配管が錆び配線が腐り、悪臭と汚水に満ちていた冷蔵倉庫の中で点検作業をしている際に、「トマケケチャップ」の錆びた缶を見付けて、腐っているかもしれないが、ともかく食べ物を手にとつて興奮したこともあった。また、煙草の葉を手に入れて、見よう見まねで煙草を作り、我々の寮歌から「薫風」という言葉をもらって、ゴム印で押して街角で売り歩いた。

ストーブにくべる物も無くなり、今日はたんすを壊したが、明日はどうするかという考えも無かった。乏しい稼ぎの中から高粱の粉を一升買って帰ると、この家の女の子がいそいそと団子を作って、たんすが燃えるストーブで、すいとんを作ってくれるが、これも一日二食となってしまうた。

夜のひとときだけが日本語の世界なのに、だれもしゃべらない。壁の外では甲高い声がすると思ふと、ひとしきり自動小銃や拳銃の撃ち合いが始まる。お袋や、おやじ、姉や弟のことを思いながら、日本に引き揚げるまで無事でいられるだろうかと考え込んでしまうことが多くなってきた。

売り食いの着物や、手芸品を手にして街頭に立つと、露助や満人がそれを冷やかして半分で買ったとき、強奪せんばかりの剣幕で半値以下で持って行った。代金を置いて行く者はまだ良い方だった。小海老の干したのが飛ぶように売れたが、声をからして売っていると、いつの間にか小孩ショウガイが

四、五人取り囲み売り上げを入れたかばんに手を突っ込んでくる。殴りつけると反動が怖いので、こっちが逃げるしかなかった。

引揚げの第一便が、大連に向かって内地の港を出航したことを短波放送で知ったが、ソ連側はうんとすんとも言わず、ただ、デマとうわさの入り交じった話だけが一人歩きをしていた。しかし、そのうちにそれが事実となってきた。

#### 四 引揚げ

引揚げの順番を巡って日本人同士の醜い葛藤が起きて、日本人労働組合が唯一の公正団体として不正摘発に乗り出した。何か琴線に触れるものを感じた私は、その青年部に加入した。引揚げ条件の関門をパスして安心している男性を、泣き叫ぶ家族を押しつけて引き立てて「人民裁判」にかけ、終始無言のその男に向かって「反動」とか「資本家」とか、「民衆の敵」などのやじを、指導者の指示に従ってどなっていた。

程なくして、「これは、自分の思いとは質を異

にする」と考えて、このグループから脱退することを決めたが、周りの人々はその勢力ににらまれることを心配していた。

昭和二十二年三月三日、我々の集団であるC—二十九団に集結の指示がきた。しばらくぶりで、五十円の銭湯に行つてこいと言われて、拝みたいような感謝の気持ちがあいた。「必要なものをそろえなさい」とも言われてお金をいただいたが、そのような好意に値することは何もしていなかつたと思うと、いただいた金額に対して申し訳なさとし難さが渦巻いていた。塩、軍手、軍足、そして米とか落花生とか人並みに買ったが、必ず買うようにと言われた二千円のシャツには手が出なかつた。

最後の食卓には幾月ぶりかの白米と牛肉があり、たくさん食べろとすすめられると、かえつて胸がつかえてしまった。私は、長く付けていた日記と歌集を惜しげもなくストープに投げ込んだ。

三月六日、十五カ月間の苦しい日々を思い返す

につれて、他人の私を家族同様に遇していただいた、この家の温かい人たちを置いて先に帰国するということには、強い自責の念を感じて、「お世話になりました」という言葉が、涙で消えてしまった。

帰国者収容所で、C—二十九団の団旗を見たときには、夢ではないかと自分の胸に付けている番号札を確かめ直したものだつた。所持品検査で、ドイツ語辞書を没収された。その夜は、収容所の講堂のようなところで寝かされ、翌朝、スターリン給与と称していた、大豆入りの玄米飯に、みそ汁まがいのものを食べた。みんなは米だ、米だと、はしゃいで喜んでパクついたが、青臭く生煮えの大豆飯だつた。その代わりに、人数分だけの感想文を書かされた。

三月八日、私は輸送班員を命ぜられ、大張り切りでボンボン、ボンボンと荷物をトラックに積み込み、それに埋もれて収容所を出発した。車の上から歩哨に向かつて「馬鹿野郎」とか、「ドスビ

ダーニャ」を口々に飛ばして、久しぶりに笑いが出た。製氷工場に雇われポンペを陸揚げしていた思い出の埠頭に着いた。引揚船は、その埠頭に「日の丸」の旗を掲げて碇泊していた。「日本の船だ!」、車上の全員が、万歳を叫んだ。感激に浸る暇もなく、露助の看視員にせき立てられながらタラップを上下して、荷物を前甲板に積み終える、大連ですることはもう何も無いとの実感がわいてきた。銅鑼の音とともに、タラップがはずされて、大連、いや中国大陸との縁は完全に絶ち切られた。暗い大きなハッチの中は落ち着いた霧囲気で、周囲の人たちが「疲れただろう!」と言って砂糖やパンをくれた。甲板のあちらこちらでは、船員を囲んで日本の情報をむさぼるように聞いている。船員の「船の中は、日本人だけです」という言葉に、みんな踊り上がって喜んでいる。

午後五時三十分出港、船が傾くほどに甲板は鈴なりになった。人々は、疲れ、呪い、そして嬉しさのこもごもの感情が爆発して、大粒の涙をぼろ

ぼろと流しながら、狂ったように「さようなら」と「万歳」を繰り返して絶叫していた。私もその一人であった。怨念と憤怒と罵倒だけが、夕闇の中をごうごうと渦巻いて流れていた。汽笛が三声鳴って、人々が滝の如くに涙を流してただ泣くうちに、大連は小さくなっていた。

満人ののぼせ上がった顔も、拳銃で「ダワイ、ダワイ」と脅かされる心配も無いことが、現実となったのだ。船室の高い天井から裸電球が下がっている。その下では、真っ黒になって五円、十円とわずかな稼ぎで日に一、二度の粥をすすって、今日という日のくるまで困苦に耐えてきた人々が、それぞれの嬉しさに浸っている。夕食は、乾パンと船員の贈り物という団子汁で、ようやく人間らしさを取り戻し、暖かな霧囲気が漂っていた。

三月十日、佐世保入港までということ、大陸名簿作りを頼まれ、英文、和文各四部を徹夜で作り終えたが、あれこれ思うことが多くて、不思

議に眠気が起きなかった。

三月十一日、午前二時、まだ夜も明けないころから、早く日本の姿を見ようとみんなは甲板に出て来た。四時過ぎ、指呼の間に待ち望んでいた故国日本の山々が見えてきた。その姿は、涙が出るほど頼もしかった。豆粒の如き裸火が見える、藁葺屋根から白い炊煙のような煙が立ち昇っている。まるで絵のような景色である。「おおい！日本だ。内地だぞ！ほら、あの山が内地なんだぞ！」と言って、みんなは涙をぼろぼろと流しながら抱き合って喜んでゐる。

佐世保の港に近くなると米軍のらしい汽艇が港内を走り回っていた。繋がれている帝国海軍の艦艇の赤錆びた姿には、一瞬心が騒ぐ。この夜は、帰国を祝って船からごちそうが出た。

三月十二日、この日は記念すべき日となった。

「六時下船」との指示に、みんなは船室内の掃除を済ませ甲板上に並んだ。私は、班の旗を持って先頭に立ち、迎えの団平船に移った。船長がス

ピーカーを通して挨拶や注意を述べたが、久しく聞かなかつた優しい声を聞くと胸が震えてきた。船員たちが船首に並び、マストに昇つてもごもに声を張り上げて別れを惜しんでくれた。ブリッジに大日章旗が掲げられて、船長が「天皇陛下、万歳！」と叫んだ。これを聞いた下船している者も一斉に「万歳！万歳！」と唱和し、涙で何も見えずに、ただ、ただ痛くなるまで手を振っていた。

栈橋に、白い鉄帽に短銃を持って立っている無表情のアメリカ兵の姿を見て、初めて我に返った。

舞台は回り始めた。今までの想像は期待に、さらに思い込みへと変わっていった。居所のはつきりしている姉に会って、家族の様子を知ることから始めることとして、鴨宮までの切符をもらって南風崎駅を出た。荒廃した風土とともに、乱暴、狼藉を欲しいままにする人々の言動に、今までの明るい希望は消し飛んでいたが、足柄の地は静か

で素朴であった。しかしながら、姉から聞く話  
は救いの無い暗いことばかりであった。

清津に着いた母と弟は、ソ連軍が上陸すると父  
とは別れ別れになって三十八度線以北の山中を逃  
げ回り、ようやくのことで大阪の吹田に帰り着い  
たが、昭和二十年の大晦日の夜に母は急死してし  
まったとのこと。遅れて帰国した父は、母を葬る  
と弟を連れて、岩手県の旧知を頼って生活の道を  
探しに行ったまま、病気になって臥せていると  
いうことだった。義兄は、ビルマ戦線で行方不明  
になったそうだ。頼るべき人は、すべていなかっ  
た。まずは父に会わなければと岩手に行ったが、  
ようやく探し当てた所は、破れ果て朽ち果てて、  
雪に覆われた寒村だった。父はそこで再起を図る  
べく住み込みで働いていたが、避難行から引揚げ  
と酷使してきた体に、冬の東北の寒気が災いし  
て、「膿胸」<sup>のうきょう</sup>を患ってしまったのだった。働きに  
来て寝込んでしまった負い目が父にとって大きな  
負担となり、「雇い主への気遣いには惨めさがあり

ありと感じた。この状態の中に私が入り込むこと  
はできなかった。吹田の伯母を頼るしかな  
かった。病床にある父を置いて去らねばならぬ心  
境は、悲痛であった。「元氣を出して！」とだけ  
言い残して駅に向かった。

途中の橋の上で、岩を嚙んで流れる激流を見つ  
めて、もはや我が命を断ちたいものとしばらく立  
ち尽くしていたが、父を救わねばという思いが先  
に立ち、そこを去った。

大阪に向かう列車でも、客車の窓から入り込む  
若者、卑猥な言葉を大声で発する女たち、皆泥沼  
をはい、生だけに執着している蛆虫のようだった  
が、その真ただ中に自分がいることを実感し  
た。

悪臭のする上野駅の引揚者待合室の壁一面に貼  
られた消息ビラの中に、知った者の名を求めて目  
を凝らし、大連市という文字を見るだけで、仲間  
に出会った如き鼓動を感じた。角帽の若者から  
ぶつきらばうに、「お茶を飲んで下さい」と言わ



れて我に返った。かくして私は、浪速の街に戻ったが、病み疲れたような私を、騒然たるこの街と人とによって、がらりと局面を変えてくれることを真剣に願ったものだった。

## 五 父と子の絆

帰国して家族のもとに戻ったら、中断していた勉強をすぐに再開したいということが、唯一絶対なる願いであったが、その願いはひとまず置いて生活の基礎固めを急がねばならないことがつらかった。

父からの示唆と幾通かの紹介状を懐にして、就職を頼みに歩いた。学友からは「時期を待つて就学しようと考えては、絶対に望みはかなわない。休学しようともいったん入学することが先決だ」とアドバイスされたが、願いと現実は両立が難しかった。

しかし、間もなく「父が貧血で嘔吐し、そのまま寝込んでいる」と弟から知らせがくるに及び、父の健康回復が第一のなすべきことと決心し、兄

弟で働いて父を支えようと決心した。父を案じ弟を思い、自らの学業継続の方途を模索し、気持ちの整理に務めた。

商事会社に勤めることが決まったが、落ち着いて本を読み思索にふけるという環境ではなかった。転入試験の準備も進まずに、不安と不満や混乱が深まっていたが、学友との盛んな文通を精神的な支えに、時間を見付けては数学や語学の教科書を開いていた。和歌山に出張したとき、偶然に旅順高の学友に会った。全く予期せぬ大連以来の邂逅であったが、その学生服姿に改めて惹き付けられた。

起居していた寮で夜中に火事があり、消火に努めている間に自室に火が回り、何も持ち出せずに夜が明けてしまった。大連から後生大事に持って帰った財産である母の写真、白線帽、大事な教科書をすべて灰にしてしまった。まさに呆然自失となった。

雑然たる日常生活の中であって、傲然たる自分

の姿を想像するだけが、そのころの私にとつての唯一の慰めであった。

ようやくにして病を克服した父は、このままここで厄介になつてはおれないと、勇躍して東京に出て生活の根柢を新しく築くことを決意し、「店を辞める決心をした。九月いっぱい当地を出るつもりで、方々に就職の交渉をしている。駄目でも上京する」と知らせてきた。さらに、「立派な男三人が揃つていて困るはずは無い。何をしてでも食べていこうという決意が無いからだ、と友人からも言われている。俺の力だけではどうにもならないから、今お前は何を措いても、我が家の再興のために、本当の意味で血闘してもらいたい」との悲痛な叫びを伝えてきた。「章治よ！理想も希望もあるだろうが、すべて一時棚上げして、できるだけ早い時期に一緒に働けるような方法を考へて、上京を目指して欲しい」と結んであつた。

関西での学業復帰はかなわなかつた。寮歌を歌

いながら夜道を帰つても、むなしい気安めでしかなく、むしろ一層の寂寥感、無力感に襲われていた。京都にしばしば足を運び、学友と話し込み何かを得ようと努力した。また、手当たり次第にいろいろな書物を読み漁つたが、何か滑稽なあがきを感じ、抜けがらのような自分を改めて見る思ひであつた。「章治さえ帰つて来れば……」と、多くの肉親が私の強い支えを待ち焦がれていることが、絶えず胸中を去来していた。

上京した父は、焼け残つていた寮の一室に辛うじて入つた。わびしい生活をしている父の姿を、ただ遠くから案じている訳にはいかなかつた。会社「家庭の事情で東京に転居したい！」と願ひ出ると、当然の如く社内は騒然となつた。創設間もない会社で仕事を放り出すことは、数少ない社員にとって問題に違ひなかつたが、敬愛する上司から「情熱を傾けて敢然と進めば、そこにこそ人間の意義が見い出せる」と言われて、涙を流したものだつた。

「ハンカチを差し上げようと思いましたが、お別れの印になるので止めました」と言って万年筆をくれた人、黙ってリングを差し出した人、『偶像再興』をくれた人などいろいろだった。見送ってくれた人々の前で、私なりの劇的なしぐさとして、高校の白線リボンをポケットから取り出して高々と振り上げた。

東京は月島の木造二階建ての古い寮、その一室が住居であった。朝鮮で別れて以来、初めて父子三人が一緒に暮らすことになった。六畳一間はいかにも貧相であったが、そのころの世間の状態では、不平不満を言う筋合ではなく、曲がりなりにもサラリーマンに戻った父、通学する弟、それに私と三人家族の世帯となった。

「生活」という命題を抱えて上京した私には、胸中を占めていた「若さ」「希望」「学究」そして「情熱」などは別な思いが加わって、そのための苦悩と混迷とが新しく体を包み込むようになっていった。

昭和二十四年二月、慶応大学通信教育部経済学科に入学の資格を得て、渴望していた「学究の徒」たるの資格を回復して意欲を新たにした。

会社での仕事は変わっていくが、学友との交流は衰えることなく、観念の渦の中で「混迷」「不可解」を楽しむかのような心境には、「進歩」「成長」の兆しは見られなかったが、次第に現実を直視し理解し、ためらいながらも、少しずつ視点は現実的生活を見つめる方向に向いていった。

そしてこの後に、新たな人間模様が、色彩豊かに展開した。昭和二十六年に私は結婚し、「学徒」としての役割は解けて、今日となった。

戦争！ もう二度といやだ！

東京都 水田 すゑ

日中平和友好条約が締結されてから、小平の来日や、両国の政、官、財の各国有力者の交流など